風立ちぬ

竹内銃一郎

【登場人物】

吉野松男　（三原山こと小川錦一の幼馴染）
ともの　（松男の妻）
さき　（松男の妹）
まりえ　（松男の娘）
宝木陽之助（散髪屋）
照子　（宝木の妻）
石松　（宝木の助手）
岩村幸雄　（さきの婚約者）
あき　（幸雄の母）
北島俊介　（まりえのボイーフレンド）
殿山　（写真屋）
坂口みすず（松男が所有するアパートの店子）
小野寺園子（高校教師　さきの恩師で幸雄の昔の恋人）
・
三原山　（元・相撲取り　さきの命の恩人）

1

吉野家の庭。下手寄りに、下から1・5米くらいのところで切り落とされた木が一本。庭を囲む垣根には白い花が咲いていて、中央あたりに庭木戸がある。庭をのぞむ座敷は縁側で囲まれていて、奥に二階への階段が見える。
初夏の午後三時ころ。縁側に松男と宝木。

松男　田舎って？
宝木　葉猥。
松男　ハワイ？
宝木　こっち（フラダンスの手真似）のハワイじゃなくて、男鹿半島の先にあるのよ、「はわい」って町が。ほら、ＵＦＯで有名な
松男　知らない。
宝木　はっぱの葉に猥褻の猥と書くんだけど。
松男　だから知らないって。（と、いささか憮然として）
宝木　本当は三年に一度、その葉猥にある工場にオーバーホールに出さなきゃいけないんだけど、費用もバカにならないし。
松男　なによ、オーバーホールって。
宝木　知らない？　オーバーホール。
松男　オーバーホールは知ってるけどさ。
宝木　一回三十万よ、三十万。だけど正直だ、ああいうものは。期限が切れたら途端にガタガタ云い出して。夜寝てると隣でこう、ガタガタ震えてるわけよ。結構ジーンとくるんだ、これが。なんだか泣いてるみたいでさ。だから、クールクールの俺でもさすがに放っておくわけにもいかなくなって。
松男　なに言ってんだ、あんた。
宝木　はい？
松男　まあ、いいんだけどさ。
宝木　なに？　なによ。
松男　それで明日、大丈夫なの？
宝木　明日？
松男　帰ってくるの？　照子さん。
宝木　さあ。
松男　さあって。
宝木　いやいや、明日のことは送り出すときにちゃんとインプットしといたから大丈夫なはずなんだけど、むこうで記憶回路のとこ、変にいじられたりしたら。
松男　どういうことよ、それ。
宝木　冗談冗談。（と、笑う）
松男　いい加減にしてほしいな、ほんとに。

宝木　ごめん、怒らせちゃった？

奥からとものが現れる。手に数珠。

ともの　なんだか楽しそうね。

松男　楽しいもんか。

ともの　こんなので良かったかしら。（と、数珠を差し出して）

宝木　ああ、上等上等。（と、それを受け取り）まったく、女房がいないとどこになにがあるのかなんにも分からないんだから。

ともの　お通夜、何時から？

宝木　六時。

ともの　嫌になっちゃうわ、この忙しいときに。

宝木　もしもアレだったら香典、一緒に持って行こうか。

ともの　そうして貰おうかしら。明日の今日じゃなんだか縁起が悪いし。ほんと嫌になっちゃう。局長もなにもこんなときに死ななくたって。

松男　しょうがないだろ、事故なんだから。

宝木　事故なのかな、ほんとに。

ともの　あ、やっぱりそう思う？

宝木　だって、二十歳やそこらのガキじゃあるまいし、夜の二時過ぎにのこのこ起きだして、あんな年寄りが車飛ばしていったいどこへ行くわけ？

ともの　それもハンドル握るの、二年ぶりだっていうんでしょ。絶対おかしいわよ。

松男　どこが？　どこがおかしいの？　いいじゃない、年寄りが車飛ばしたって。誰にだってあるじゃない、自分にもわけが分からない事をしてしまうことが。

宝木　そこそこ。だから、局長はどうしてそんなわけの分からない行動に出たかってことなのよ、問題は。確かに、ハンドルを切り損ねたのよ、スピード出し過ぎたのよ。

松男　だから事故でしょ。

宝木　事故かも知れない。当人もそんなつもりはなかったのかも知れない。でも無意識のうちに

松男　無意識だ？

宝木　そう、無意識無意識。そこを読まなきゃ。

松男　事故だよ。警察も事故だって、遺書らしきものはなにもなかったって言ってンだから。

ともの　それがあったのよ。

宝木　あったの？！　遺書が。

ともの　遺書はなかったんだけど。

宝木　どっちなのよ、いったい。

ともの　だから、遺書らしきものよ。局長は小学校のころから毎日ずっと欠かさず日記

をつけてたんだって。
宝木　じゃ、その日記に。
ともの　そうなの。その日記の最後の頁に。
宝木　なんて書いてあったわけ？
ともの　なんにも書いてなかったのよ。
宝木　もう！　関節外しちゃうから。
ともの　だからそれが、日記の最後の空白の頁が、言わず語らずの遺書なのよ。
宝木　マイッタ、降参。読んだね、奥さん。
ともの　いじましいけど、なんだか分かるわ、局長さんの気持ち。
宝木　罪なことをしたよ、さきちゃんも。
ともの　業が深いから、あの子。
松男　なんだ、身内のお前まで一緒になって。被害者はこっちだろ、さきの方じゃないか。局長、歳いくつ？　うちの死んだ親父と変わらないのよ。そんな爺に追い回されて、さきだって困ってたじゃないか。そもそも岩村くんとの結婚話だって、局長があんなストーカーまがいの真似さえしなきゃ、こんなにバタバタ慌てて決めることなんてなかったんだ。
宝木　ひどいね、死んだひとをつかまえて。
松男　そうなの、死んじゃったの、もう。十分でしょ、それだけで。ハタがあれこれ詮索することはないんだ。そっとしとけばいいんだよ、関係ないのよ、さきもわたしらも。（と、立ち上がる）
ともの　なに？
松男　ウガイ！　（と、奥に消える）
ともの　なにもあんなにムキにならなくったって。
宝木　変わってるね、おたくの旦那。
ともの　宝木さんに云われりゃ世話ないわ。
宝木　だって普通しないよ、こんなシチュエーションでウガイなんて。
ともの　風邪ひいてンのよ、昨日から。
宝木　なんだ。おれはまた、マッちゃんは怒るとウガイするのかと思って。あ、アリだ。
ともの　え？
宝木　ほら、あそこ。ひと雨くるのかな。（と、アリを見るために屈む）
ともの　そう？　（と、空を見上げて）

幸雄が庭木戸から入って来る。手に旅行鞄。

幸雄　どうも。
ともの　ああ、幸雄さん。
幸雄　ただいま帰りました。

ともの　お疲れさま。
宝木　どこに決めたの？
幸雄　え？
宝木　新居。探しに行ったんでしょ。
幸雄　ああ。行徳に。
宝木　ギョウトク？
幸雄　浦安のふたつ先にあるんですけど。
ともの　ウラヤス？
幸雄　デズニーランドがある　…
ともの　ああ、あっち。
幸雄　一戸建てとなると、やっぱり千葉あたりまで足を伸ばさないとなかなか。
宝木　千葉ちゃんか。
幸雄　千葉ちゃん？

松男が戻って来る。

幸雄　どうも。
松男　なに、旅行？
ともの　だから、家を探しに。
松男　ああ、そうかそうか。
ともの　ギョウトクに決めたんだって。
松男　行徳？
ともの　ウラヤスのふたつ先の
松男　知ってる。
幸雄　それでこれ、お土産なんですけど。（と、鞄から取り出して）
ともの　そんな、気を使わなくっていいのに。
宝木　（それを見て）べたお？
ともの　おたべ！
松男　「おたべ」ってこれ、京都みやげじゃないの？
幸雄　すみません。時間がなかったもんで東京駅のキオスクで　……
ともの　幸雄さんらしいわ。

みんな、笑う。
座敷の奥に三原山が現れる。誰もそれに気づかない。

幸雄　さきさんは？
ともの　会社。
幸雄　土曜なのに？

ともの　なんだかまだ仕事が残ってるからって云って。
松男　立つ鳥あとを濁さずってヤツさ。
幸雄　やっぱりさきさんは　……（と、満足そうに頷く）。

宝木、三原山に気づく。と、三原山はふっといなくなる。

宝木　なんだ、あいつ。
松男　なに？
宝木　いまそこに三原山が。
松男　（振り向いて）　……いないじゃない。
宝木　おれと目があったらいなくなったんだよ。
ともの　シャイだから、あのひと。
宝木　シャイ？　あいつが？
ともの　ああ、いい風だわ。
幸雄　夏蒲団　三つ並びて　燦々と
松男　うん？
幸雄　さっき、ここへ来る途中で、田所さんちの二階のベランダに蒲団が干してあるのを見て、そこで一句。三つ並んでるのがなんだか微笑ましくて、ああ、自分もこんな家庭を築けたらなあと。
松男　「夏蒲団　三つ並びて　燦々と」。なるほど。言いたいことは分かる。だけど、三つと燦々じゃ、なんだか駄洒落みたいでさ。川柳ならともかく。
幸雄　確かに。自分ではそんなつもりはなかったんですが。
松男　そこそこ写生は出来てンだけどね。
宝木　射精！　ああ、こっち（描く真似）の方ね、あっちじゃなくて。
松男　だから、そう、「三つ並びて」というのを「川と並びて」と言い換えてはどうだろう。
幸雄　夏蒲団　川と並びて　燦々と
松男　ちょっと月並みだったかな。
幸雄　とんでもない。「夏蒲団　川と並びて　燦々と」。ぼくの句より風景の輪郭が、こう、くっきり浮かび上がってくるといいますか　……
松男　いや、ダメだ。最後の「燦々と」っていうのが夏蒲団を殺してる。なにかこう、動くもの、動くもの　……
ともの　風は？
松男　風？
ともの　風立ちぬ、とか。
松男　立っちゃダメだな。風吹きぬ、いや、「吹けり」とした方が動きが出るか。
幸雄　「夏蒲団　川と並びて　風吹けり」。決まりましたね。前よりずっと躍動感があって。

松男　相変わらず甘いね、きみは。夏・川・風？　句会に出したらみんなの笑いモンだよ。
幸雄　ああ　……
松男　ああ、じゃないよ。きみの句なんだろ。
幸雄　……
宝木　頑張れ、ユッキー。
幸雄　あ。
松男　なに？
幸雄　こ、これはどうでしょう。「夏蒲団　川と並びて　負けるなよ」。
松男　夏蒲団　川と並びて　負けるなよ
ともの　いいじゃない。なんか、幸雄さんの新生活に向けての意気込みが伝わってくる。
松男　うん。単なる客観写生から一歩踏み出してる。というより、勢いあまってはみ出してる。そこがいい。秀作！
幸雄　ありがとうございます。
宝木　人生万歳だ。

みんな、笑う。なぜかは知らねど。

ともの　お茶でもいれましょうか。
松男　そうだね、甘いものもあるし。
幸雄　すみません、ぼくはこれで。
ともの　帰るの？
幸雄　引越しの準備もあるんで。
ともの　ああ、そうね。じゃ　……
幸雄　（宝木に）明日はよろしくお願いします。
宝木　明日？　なんかあったっけ？
ともの　宝木さん。
宝木　かましてみたかったのよ、この幸せ者に意地悪を。
幸雄　失礼します。（と、去る）
松男　「夏蒲団　川と並びて　負けるなよ」か。うまくいくといいがね。
ともの　大丈夫よ。さきちゃん、しっかりしてるし。
宝木　アレ？
ともの　どうしたの？
宝木　なんか震えてない？
松男　え？
宝木　震えてる震えてる。
松男　地震？
宝木　ああ、電話だ。（と、ポケットから携帯を取り出す）

松男　（ムッとして）　……
宝木　もしもし。え？　客？　小母Q？　照子は？　しょうがねえな。分かった。すぐ帰るよ。
ともの　照子さん、まだ帰ってないの？
宝木　渡り鳥いつまた帰る。
松男　明日、ほんとに大丈夫なの？
宝木　大丈夫だよ、スペアもあるし。
松男　なによ、スペアって。
宝木　だから、照子2号よ。
松男　あんたさあ。（と、声を荒げて）
宝木　見えた　なにが？　永遠が　海に溶けていく。「地獄の季節」か。（と、庭木戸から去る）
松男　（見送って）　……バカ。
ともの　なんであんなひと、仲人に決めちゃったの。
松男　それが分からない。
ともの　無責任なんだから。
松男　お前だって反対しなかったじゃないか。
ともの　冗談だと思ってたのよ。聞いたらさきちゃんも幸雄さんも、みんなそう思ってたって。

三原山、奥から顔を出す。

三原山　ちょっといいですか。
ともの　あ、小川さん。
三原山　この近所に散髪屋は？
松男　出かけるの？
三原山　明日の結婚式にこんな頭じゃ。
ともの　床屋さんだったらそこの坂を下りて、右に曲がって少し行ったところに。こういうの（ネオン）が出てるからすぐに分かるわ。
三原山　坂を下りて右ってことは、郵便局のある方だ。
ともの　そう、昨日小川さんが散歩に出かけたのと逆の方。
三原山　じゃ、ちょっと　……（と、出かけようとすると）
ともの　あ、いま行くと待たされるかもしれない。
松男　そうだ、いま客が来てるって。
ともの　嫌でしょ、待たされるの。
三原山　ええ、まあ　……
ともの　予約入れとくわ、三十分後に行くって。（と、立って）
松男　ついでにお茶。

ともの　はいはい。
三原山　お手数かけます。
ともの　目尻のところ。（と、すれ違いざまに）
三原山　え？
ともの　めやにが。（と、去る）
松男　あいつ、結婚する前、目医者で働いてたから。

三原山、縁側にやって来る。

三原山　帰ったの？　あいつ。
松男　あいつって？
三原山　さっきまでここにいた　……
松男　宝木さん？
三原山　あいつ、宝木っていうの？
松男　紹介したじゃない。
三原山　覚えてないよ、あんな男の名前なんか。
松男　寝てたの？
三原山　昼飯食べたらなんとなく眠くなって　……。夢を見てた。
松男　どういう？
三原山　なにが？
松男　だから、どういう夢を見たのよ。
三原山　どうしてもって言うんなら話すけど。
松男　（クスッと笑い）そういう言い方聞くと、ああ、錦ちゃんだなあって思うんだけどさ。
三原山　なに？　まだ疑ってンの？
松男　だって小川錦一。オガキンといえばデブ、デブといえばオガキンて、おれの頭の中ではずっと、デブと錦ちゃんはイコールで結ばれてたわけだから。そこんとこ外されて、それもいきなり登場されたら、二日や三日じゃなかなか修正できないよ。
三原山　分かる。裸になると自分でも、これはおれじゃないって思うくらいだから。
松男　でも、いいタイミングで　……。錦ちゃんのことは時々話には出てたんだ、どこでどうしているんだろうって。なんたって、錦ちゃんはさきの命の恩人だからさ。
三原山　……
松男　あれから二十年だよ。
三原山　幾つになったの？　あの子。
松男　だから、二十九。まあいろいろあったけど、三十前にはなんとか嫁に出さなきゃって思ってたから、これでやっと肩の荷がおりたっていうか　……

三原山　あのときのことはいまでもはっきり覚えてるよ。あの子はそんなに水を飲んだわけでもなさそうだったし、おぶってここまで運んできたときにはもう意識もしっかりしてたから、濡れた服を着替えさせ蒲団に寝かせて、それで帰ってもよかったんだ。でも、家には誰もいなかったし、なんだかこっちも別れがたくて　……。浴衣に着替えたあの子はここに座って、おれはそこで、その柿の木の下で、せがまれるまま、何度も何度も横綱の土俵入りの真似なんかしてやったんだ。四股を踏むたび、あの子は「ヨイショッ！」と、女の子とも思えない声を出し、柿の木が揺れて葉が騒ぎ、そう、いまも垣根に咲いてるあの白い花が、まるで国技館の客席を埋める観客のように見えたんだ。

松男　初めて聞いた。

三原山　そう。

松男　あいつ、なんにも話さないから。川で溺れたことだっておれ、ずっと知らなくってさ。米屋の旦那に聞いて、しかも、助けたのが錦ちゃんだったって言うから、インド人も二度びっくりよ。

三原山　マッちゃんに心配かけたくなかったんだ。そういう子だよ、あの子は。

松男　そんなことされたら立場ないじゃない。だっておれ、あいつの親代わりよ、世間だってみんなそういう目で見てるんだから。今度の結婚だってそうだよ。いきなりだよ、なんの前触れもなくいきなり、あの岩村と結婚したいって云い出して。まあ、こんなこと錦ちゃんに話したってアレだけど。

ともの、コップに麦茶を入れて、戻って来る。

松男　おれ、お茶って言わなかった？

ともの　だって今日は暑いから。

松男　お茶って言ったらお茶を持ってくればいいんだよ。

ともの　分かったわよ。（と、戻ろうとする）

松男　いいよ、持って来ちゃったんだから。

三原山　ごっつぁんです。（と、麦茶を飲む）

ともの、笑う。

三原山　あの木、なんで切ったの？

松男　五年前の台風でやられちゃって。

三原山　ドスコイってか。容赦ねえな、自然ってやつは。

松男　あの木のことだけどさ。

三原山　なに？

松男　細かいことだからどうでもいいようなもんだけど　……

ともの　だったら話すことないじゃない。

松男　関係ないだろ、お前には。
ともの　あなたの話はいつもそうなんだから。（と、「おたべ」を手にして立ち上がる）
松男　え、持ってくの？　それ。
ともの　だって小川さん、甘いものはからだに障るから。なに？　食べたいの？
松男　（憮然として）別にそういうわけじゃないけどさ。
ともの　いけない。宝木さんに香典渡すの忘れちゃった。
松男　（舌打ちをして）なにをしてるんだ。
ともの　小川さん、悪いけど、出かける時ついでに持ってってくれる？
三原山　いいですよ。どこですか、家は。
ともの　いやだ、もう忘れたの？　だから、坂を下りて
三原山　え？
ともの　郵便局の方へ行けばこんな（ネオン）のが
三原山　（遮って）ちょっ、ちょっと待って下さい。すみません。さっきお願いした予約、取り消してもらえますか。
ともの　あら、どうして？
三原山　だってあいつの店でしょ、お喋り野郎の。他にないんですか？
ともの　無口な床屋さん？
三原山　いや、あいつのとこ以外ならどこでも。
松男　ずいぶん嫌うね。
三原山　間違ってるよ、あんな男が　……
ともの　駅前に美容院ならあるけど。
三原山　いや、それは　……

さき、座敷の奥に現れる。

さき　ただいま。
松男　ああ、お帰り。さっき岩村くんが　……
さき　義姉さん、悪いんだけど。
ともの　なに？
さき　あんなことでいちいち会社に電話なんかしないでくれる。
ともの　ごめんなさい、急いでたもんだから。
さき　なんだっていいのよ、ブーケの花なんかどうだって。
ともの　そうはいかないわ。だってせっかく　……
さき　（松男に）なんだって？　幸雄さん。
松男　家、行徳に決まったって。
さき　他には？　なんか言ってなかった？
松男　いや、別に。
さき　そう。（と、去る）

ともの　ああ、あ。（と、不快を露に）
俊介の声　（奥で）お帰りなさい。
松男　会社でなんかあったのかな。
ともの　知らない。
俊介　（現われて）すみません。まりえさんがなにかないかって言ってるんですけど。
ともの　なにかってなによ。
俊介　お腹がすいたって。
ともの　どうして自分で来ないの？
俊介　ぼくに言われても　……
ともの　これ（おたべ）持ってきなさい。お茶がほしけりゃ自分でいれろって。
俊介　はい。（と、受け取って）失礼します。（と、去る）
松男　おい、大丈夫なのか。
ともの　なにが？
松男　部屋でふたりでなにしてるんだ、いったい。
ともの　知らない。
松男　知らないってお前　……
ともの　そんなに心配だったら自分で見てくればいいでしょ。
俊介　（戻って来て）あのう　……
ともの　なに？　（と、苛立って）
俊介　三原山さんは、見張山とは違うんですよね。
ともの　どうしてわたしに聞くの？
三原山　なんだ、ミハリヤマって。
俊介　見張りのミハリに山って書いて。英語で言うとウオッチング・マウンテンですか。インターネットで調べたんです。昭和五十一年の名古屋場所、西十両十三枚目に見張山っていうひとが　……
ともの　違うわよ。このひとはラリルレロのラ、ミ・ハ・ラ・ヤ・マ。
俊介　だったらいいんです。お邪魔しました。（と、去る）
松男　なんなんだ、あいつは。
ともの　だから知らないわよ。わたしはなんにも知らないの、なんにも分からない。ああ、気が狂いそう！　（と、足早に去る）
松男　さっきの話の続きだけどさ。さっき錦ちゃん、あの木のこと、柿の木みたいに話してたけど、いや、いいのよ、いいんだけどね。
三原山　いいの？
松男　だから、いいのよ。
三原山　そうじゃなくって、奥さん。
松男　奥さん？
三原山　いま、気が狂ったって。
松男　よせよ、狂いそうだって言ったんでしょ。

三原山　いいの？　ほっといて。
松男　いいのいいの。いつもあんな調子なんだから。
三原山　？
松男　ずいぶん時間も経ってるし、多分、別の記憶とごっちゃになってるんだと思うけど、あれ、（言いにくそうに）桜なんだよね。
三原山　え？　桜がどうかしたの？
松男　だから、あれ。柿の木じゃなくて桜なんだよ。
三原山　いつから？
松男　昔から。
三原山　なに言ってンの？
松男　ごめん。大切な思い出に冷や水ぶっかけるようで申し訳ないんだけど、これが事実だから、一応　……

三原山、急いで庭に降りて木を確かめる。

松男　どっかにサクラって書いてない？
三原山　バカ言ってンじゃないよ。おれはここでこうして、そこにあの子が　……、そうだよ。おれがこうして四股を踏むと、この木が揺れて葉が騒ぎ、あの子の掛け声におされて、さらにもっと足を持ち上げ、さらにもっと力を込めて四股を踏んだら、真っ赤に熟れた柿の実が三つ四つと枝から落ちてきたんだから。
松男　そんなわけないじゃない。だって昔からずっと桜だもん、これは。春になるとこの木の下で、みんなでお花見したんだから。
三原山　マッちゃん、あんた狂ってるよ。
松男　狂ってないよ。
三原山　狂ってるよ。見れば分かるでしょ、これが桜の木だったら、もっとこう、アレしてるはずじゃない。
松男　そうだよ。これが柿の木ならもっとこう、アレしてンだよ。
三原山　なんだよ、アレって。全然分からないよ。
松男　だから、こう　……、アッ。

垣根の向こうに、みすずが現れる。

みすず　ごめんなさい、お取り込み中のところを。
松男　いや、全然。
みすず　おトイレの水が　……
松男　また？
みすず　別に変なのもは流してないんですけど。
松男　どうなってんだ、いったい。

みすず　すみません。
松男　いや、坂口さんは別に。ちょっと見てみましょう。
みすず　お願いします。
三原山　おい、逃げるのか。
松男　忙しいんだ、わたしは。バカにつきあってる暇なんかないんだよ。

松男とみすず、去る。
ひとり残された三原山、記憶の中ではありありと見える柿の木を、目の前の切り株に接ぎたし、それを見上げて感慨にふける。
ともの、戻ってくる。

ともの　うちのひとは？
三原山　あ、いまちょっと　……。いけない、裸足で　……（と、慌てて縁側に座り、足裏を手で払う）
ともの　さっきはごめんなさい。
三原山　え？
ともの　おかしな女だって思ったでしょ。
三原山　いや、そんな　……
ともの　思ってるわ、ゼッタイ思ってる。自分でもそう思うもの、おかしいって。被害妄想っていうのかしら。みんなが寄ってたかってわたしをいじめてるような気がして、時々わけが分からなくなるの。ううん、わけは分かってるの。こんなことをしちゃいけない、云っちゃいけないって、頭のどこかにはあるんだけど、一度タガが外れたらもう駄目。そう思えば思うほどいけない方へ、危ない方へ、雪のかたまりが坂道を転がり落ちてくみたいに、加速度がついて、暴走しちゃうの。そう、結局、不満があるのよ、いまの生活に。いくら頑張っても認められない。報われないから、少しも気分が充たされない。したいことをすればいいのよ。自分がしたいことをしたいようにすればそんな不満も解消するの。分かってるの。だけどそれが出来ない。なぜ？　誰がそれを抑圧してるの？　家族？　家庭？　ご近所？　社会？　アメリカ？　そうじゃない。自分でしょ、自分なのよ。全部自分。わたしをいじめてるのもわたし。被害者がわたしなら加害者もわたし。わたしわたしわたし。抜け道がどこにもないの、どこにもないから暴発するの。いけない。
三原山　？　なにか？
ともの　わたし喋りすぎてる。きっとこれも暴発の一種ね。小川さんは嫌いでしょ、こういう女。
三原山　トンデモハップン。
ともの　だってさっき宝木さんのこと　……
三原山　タカラギ？　ああ、あいつ。あいつは喋るとか喋らないとか以前の問題で、い

や、そもそも問題なんかないんだ、ありっこないんだ、あいつには。

ともの　（笑って）　……

三原山　おかしいですか。おかしいかな。

ともの　昨日初めて会ったひとをつかまえて、なにもそこまで。

三原山　なんだかムカツクんですよ。例えば、セミが鳴くのに、鳴いてるセミに問題あります？　ないんですよ。ありゃ、鳴きたいから鳴いてるだけで、なにか誰かに伝えたいことがあるわけじゃない。同じなんですよ、あいつも。ただ喋りたいから喋る。セミが羽をこすって音を出すように、あいつは口をパクパク動かして、無意味な音を並べてるだけなんですよ。

ともの　求愛でしょ、あれは。

三原山　キュウアイ？

ともの　求める愛。

三原山　愛！

ともの　ううん、宝木さんじゃなくてセミ、セミが鳴くのは。

三原山　愛だなんて　……（と、片手を頬に）

ともの　だってセミは、地上に出たらすぐに死んじゃうんだもの。生きてるうちにしたいことしなきゃ。（三原山の頬の手が気になり）蚊？　蚊にさされたの？

三原山　あ、いや。いきなり張り手をかまされたようでなんだか　……。暑い。（と、汗を拭う）

ともの　そうだ、小川さんに見せたいものが。（と、持っていた写真を差し出す）

三原山　（受け取って）これは？

ともの　証拠写真よ。

三原山　ああ、昨日話してた　……

ともの　そう。小川さんがいた千石谷工業のラグビー部が、うちの高校へ練習試合に来た時の　……

三原山　ほんとだ。いるよデブが、真ん中に。

宝木、現れるが、親密そうなふたりの様子を見て、垣根に隠れる。もちろん、ふたりはそれに気づかない。

ともの　それから、ここにいるのが

三原山　誰ですか？

ともの　わたし。

三原山　これが？

ともの　男の子みたいでしょ。こんなに日焼けして。

三原山　ああ、この色の黒いチビ。

ともの　思い出した？

三原山　そうそう。小さなからだで、大きなやかん持って　……

ともの　それそれ。それがわたしなの。
三原山　甲高い声で、回せ回せって　……
ともの　それそれ、それが　……
三原山　猿ケ石高校のマネージャー。
ともの　それそれ、それが。
三原山　会ってたのか。
ともの　会ってたの。会ってるのよ、わたしたち、高校の時に。嫌だ、わたしったら、
　　これくらいのことで。（と、涙を拭く）
三原山　ちょっと。
ともの　なに？

三原山、いきなり足もとにあったサンダルを垣根に投げる。

宝木　（顔を出し）危ないなあ、なにするんだ！
三原山　お前こそなにしてるんだ、そんなところで。
宝木　いいだろ、なにしてたって。
三原山　よくないから云ってンだ。
ともの　そうよ、趣味が悪いわよ、立ち聞きなんて。
宝木　してないよ、立ち聞きなんか。立ってもいないし、あんたたちの話を聞いてもいない。おれはアリを見てたんだ。
三原山　アリだ？
宝木　いけないのか、ここでアリ見てちゃ。
ともの　なにか用事？
宝木　香典香典。さっきおれに持ってってくれって。
ともの　そのためにわざわざ？
宝木　そうだよ。栃木の人間はみんな律儀なんだから。
ともの　え、福島じゃなかったの？
宝木　なにが？
ともの　宝木さんの田舎。
宝木　照子の田舎でしょ、福島は。
ともの　じゃ、秋田はなに？
宝木　秋田？
ともの　いま秋田に帰ってるんでしょ、照子さん。
宝木　だからそれは　……。いいじゃない、ひとの家のことはどうだって。香典香典。
　　早くしてよ、こっちも忙しいんだから。
ともの　はいはい。（と、去る）
宝木　（縁側に座り）暑いねえ。
三原山　……

宝木　写真？

三原山、黙って写真をポケットに入れる。

宝木　突っ張る突っ張る。（と、笑う）

玄関で。

小野寺の声　こんにちは。
とものの声　あら、小野寺先生。
小野寺の声　このたびはおめでとうございます。
とものの声　お陰様で。小野寺先生にもいろいろお世話になって。
小野寺の声　それでこれ、詰まらないものなんですけど、お祝いに。
とものの声　あらあら、すみません。明日でもよかったのに。
小野寺の声　いえ、それが。明日は急な用事が出来てしまいまして　……

三原山　ひとつ聞いていいかな。
宝木　明日は何時の電車？
三原山　これ、なんの木？
宝木　切符は？　もう買ってるの？
三原山　さっきマッちゃんとアレして　……
宝木　今日のうちに買っとかないと。
三原山　マッちゃんは桜だって言うんだけどさ。
宝木　混むよ、明日は、日曜だから。
三原山　柿だろ。
宝木　帰るんでしょ、明日。
三原山　柿の木でしょ、これは。
宝木　え、帰らないの？　いいの？　帰らなくって。
三原山　なに云ってんだ。
宝木　今日で五日目でしょ。
三原山　おい。
宝木　こんなに長く家あけて、心配しない？　家族。
三原山　誰と喋ってンだ。
宝木　あ、いなかったんだ、家族。
三原山　おい。
宝木　そうだそうだ。
三原山　アタマくンなあ。
宝木　いいやね、ひとりもんは自由で。

三原山　どっち？
宝木　自由か。自由ねえ。
三原山　柿？　桜？　どっちなの？
宝木　ひとは結局、孤独とひきかえにして自由を獲得するんだよね。あ、ごめん、哲学しちゃって。
三原山　コノ野郎！　（と、いきなり宝木の首を絞める）
宝木　な、な、なにをする。
三原山　ひとが真面目に聞いてンのにペラペラひとりで勝手に喋りやがって。

宝木、悶絶！

三原山　（それに気づいて）あれ、やっちゃったかな？　おい、しっかりしろ、オイ！
（と、宝木を揺り動かす）

ともの、香典を持って戻って来る。

三原山　あっ！　（と、慌てる）
ともの　どうしたの？
三原山　なんだか急に眠くなったって言って。（と、笑って）
ともの　しょうがないわね、もう。ちょっと、宝木さん。
三原山　あ、起こしたらまたなんだかんだってうるさいだけだから、しばらくこのままにしといた方が。
ともの　ハァ　……（と、ため息ひとつ）
三原山　なにかあったんですか。
ともの　うちのひと、どこ行ったの？
三原山　女がさっき。
ともの　オンナ？
三原山　背の高い　……
ともの　坂口さんだ。
三原山　トイレの水がどうとか言ってきて、それで　……

奥に、まりえと俊介が現れる。

まりえ　お母さん、北島くん帰るから、そこまで送ってく。
俊介　お邪魔しました。
ともの　小野寺先生にご挨拶した？
まりえ　来てるの？
ともの　さきちゃんの部屋にいるから。

俊介　どうしよう？　これ。
まりえ　見せればいいじゃん。そのために持ってきたんでしょ。
ともの　なに？
俊介　これ、インターネットで調べて。三原山さんの、序の口から幕下９枚目で引退するまでの、全場所の星取表です。（と、とものに渡して）失礼します。

まりえと俊介、去る。

三原山　ちょっとそれ。
ともの　（ボーっとしていて）　……
三原山　奥さん。
ともの　え？　あ、これね。ごめんなさい、わたしったらまた　……（と、紙を渡して）時々、心ここにあらずって云うのかしら、わたしをほったらかしにして気持ちがどこかへ行ってしまうの。どこへ行くのかしら？　気持ちは。そんなこと知らないわ。でも、きっとどっかにあるのね、安らげる場所が。うらやましい。え？　ちょっと待って。と云うことは？　わたしというのはからだのことで、気持ちはわたしじゃないのかしら。え、どういうこと？　じゃ、いまこうして理屈こいてるのは、からだ？　からだも考えるの？
三原山　なんだ、こりゃ。
ともの　え？
三原山　冗談じゃないな。ほら、この最後のところ。（と、紙を示して）

とものが紙を覗き込もうとしたところへ、庭木戸から殿山が現れる。

殿山　こんにちは。
ともの　ああ、殿山さん。
殿山　すみません、こんなところから。ちょっと急いでるもんで。いやあ、困った困った。
ともの　なにかあったんですか？
殿山　急な仕事が入ってしまって。
ともの　急な仕事？
殿山　六本松に乙姫殿って大きな結婚式場があるでしょ。あそこで写真撮ってる猪熊が今朝、盲腸で入院してしまって。その代理でわたしに明日、来てくれって云うんですよ。確か、こちらは一時からですよね。
ともの　ええ。
殿山　出来れば時間をちょっと遅らせて　……
宝木　（いきなりガバと起き上がり）バカ言ってンじゃないよ。

三人、驚く。

宝木　出来るわけないだろ、そんなこと。
殿山　でも、一時間くらいなら
宝木　駄目。
殿山　じゃ、三十分
宝木　駄目だよ、みんなその時間にあわせて来るんだから。
殿山　だってむこうは日当がずいぶん
宝木　駄ァ目！
殿山　お金がいるんですよ。この秋から娘がアメリカの学校に
宝木　しつこいね、あんたも。明日五分でも遅れて来たら、家に火つけるから。
殿山　分かったよ。クソッ。財布かと思って拾ったらそれはウンコで、慌ててどぶに捨てたら、チャリンと音がして、実はウンコの中に金貨が入ってたんだ。（と、捨て台詞を吐いて、去る）
ともの　どういう意味なの？
宝木　ナンセンス。
ともの　えっ？
宝木　奥さんはすぐそうやっていちいち考えるから、考えすぎるから、暗くなったり不安になったりするのよ。大体、あんな太った男のいうことに意味なんかあるわけないの。人間は死ぬと骨になる。骨だけが残る。あんな、いずれはなくなる肉の塊に、意味があるわけないでしょ。
三原山　あっ　……（と、よろめく）
ともの　どうしたの？　小川さん。
三原山　いや、ちょっとめまいが。
ともの　宝木さんのせいね。
宝木　え、おれ？　なにしたのよ、おれが。
ともの　（香典を差し出し）はい、これ。帰ってもう。
宝木　なによ、その態度。なんか誤解してない？　こいつ、さっきおれの首を絞めたのよ。めまいどころか、死にかけたのよ、おれは。
ともの　ハイハイ。分かったから　……
宝木　なによ、ハイハイって。おれ大人、赤ん坊じゃないんだからさ。

石松が垣根のむこうに現れる。

石松　親方！
宝木　おお、石。ごめん。小母Q、怒ってる？
石松　帰りました。
宝木　ダメだろ、帰したら。なにやってんだ、どいつもこいつも！

石松　すみません。それであのう、奥さんが　……
宝木　なに？　照子、帰って来たの？
石松　ええ。さっき店の方に連絡が。親方に話があるから「ドラキュラ」まで来てくれって。
宝木　なによ、ドラキュラって。
石松　駅前にある　……
宝木　知ってるよ、喫茶店だろ。なんで家に帰って来ないのかって聞いてンの、俺は。
石松　さあ、それは　……
宝木　ったく、ロボットの癖に。（と、庭木戸から去ろうとして）あっ、ユッキーが太ったおふくろと。あっ、おふくろ転んだ。おっ、ユッキーはそれを見て見ぬ振りして。おふくろ、慌てて立ち上がり、あっ、また転んで。あっ、なんと坂道をコロコロ転がり落ちてく。
あきの声　（遠くから）幸雄ぉーーー。
宝木　おふくろ呼べど叫べどユッキー知らぬ存ぜぬ。なんと非情な

幸雄、足早に現れる。

宝木　よお、ユッキー。

幸雄、それを無視して庭に入って行く。

石松　親方、早く行かないと奥さんが
宝木　ああ、心はふたつ身はひとつ。

宝木、石松に腕を引っ張られて、ともに退場。

幸雄　さきさんは？　いるんでしょ。
ともの　ええ、さっき。
幸雄　出して下さい。
ともの　え？
幸雄　出して下さい、さきさんを！
ともの　どうしたの、いったい。
幸雄　どうしたもこうしたも！　さきさんが、さきさんがさきさんが。（ワナワナ震えている）
ともの　落ち着いて幸雄さん。いったいなにがあったの？
幸雄　さきさんがさきさんがさきさんが。（と、なおも激しく震えて）
三原山　ああ、水だ、水。いや、わたしが、とりあえず暇なわたしが　……（と、ともの）を制して奥に消える）

幸雄の悲痛な叫び声を聞いて、宝木、戻って来る。

幸雄　落ち着け。落ち着け幸雄！　（と、頬を叩く）

ともの　幸雄さん　……

石松　（現われて）親方！

宝木　分かってるよ。

石松　だったら早く　……

幸雄　大丈夫です。すみません、取り乱してしまって。

ともの　いったいなにがあったの？

幸雄　実は、さきさんが明日の結婚式を延期してくれって。

ともの　延期？！

幸雄　ええ。三日ぶりに家に帰ったら

宝木　ちょっとちょっと、なに言い出すのよ。

石松　親方！

宝木　バカ。おれは明日の仲人だぞ。こんな一大事をほっておけるか。

石松　でも奥さんが　……

奥からさき、現れる。

幸雄　さきさん。

さき　読んだの？　手紙。

幸雄　読んだよ。だからこうして　……、あれ？　手紙手紙　……（と、ポケットを探りながら）

宝木　手紙って、これ？　（と、自分のポケットから取り出す）

幸雄　ああ、それです。どうして宝木さんが

宝木　いまそこで。（と、幸雄に渡す）

ともの　掏ったの？

宝木　拾ったんだよ！　どうしてそんな風に。みんな誤解してるよ。善意のひとなのよ、おれは。

石松　親方！

宝木　うるさいな。話がついたらすぐに行くから。お前、先に「ドラキュラ」に行って照子に

石松　おれ、もうどうなったって知りませんから。（と、去る）

宝木　（見送って）　……

幸雄　さきさん、こ、これはどういう　……

さき　ごめんなさい。わたし、わたしどうかしてたの。そんな手紙を書くつもりはなかったの。わたしはただお式の前に、ふたりで新しい生活を始める前に、手紙

を書いてひとつの区切りをつけたいと思っただけなの。

幸雄　区切り？

さき　そう。なにか、改まった気持ちでお式にのぞみたいと思って。だからどこか、どこか他人行儀な、お互いがまだ他人であることをことさらに強調するような、手紙でしか言えないような、会って直接口にするのはちょっと恥ずかしいような、これまでいろいろありましたが、きっとこれからもいろいろあるでしょうが、ふたりで力を合わせ、手を取り合って頑張りましょうみたいな、そんな、ありきたりといえばありきたりな手紙を書くつもりで。

内容なんかどうでもよくて、ただ幸雄さんにあてた手紙を書けば、それで十分だったはずなのに。

でも、いざ書き始めると、そんなおためごかしじゃ済まなくなって、なんだか変に気持ちが高ぶってきて、素直に、正直に、というより、ありもしない、思ってもない、嘘でもいいから、これを読む幸雄さんがびっくりするようなことを書かないと、なんだかいけないような気持ちになって　……

幸雄　ということは、つまり　……

ともの　かつがれたのよ。サービスされちゃったのよ、幸雄さん。

幸雄　さきさん。

さき　ごめんなさい。

幸雄　ああ、いや。こんな手紙を真に受けたこっちの方が。ぼくは堅物で冗談が分からないから。勉強勉強。（と、笑う）

宝木　ダメだよユッキー、笑ってすませちゃ。こういう時は一発ガツンといっとかないと。

ともの　そうよ。女はすぐにつけあがるから。

幸雄　じゃ。この悪戯っ子が。ガツン。（と、さきの頭を軽くぶつ）

ともの　もう、幸雄さんったら。

みんな、笑う。互いの愚かしさを認めあうかのように。と、そこへ小野寺が奥から現れる。

小野寺　吉野さん、これでいいの？　違うでしょ、そうじゃないんでしょ。

さき　先生！

小野寺　どうして？　どうしてそうやって自分の気持ちをごまかすの？

ともの　ごまかす？

小野寺　ええ。いまの、吉野さんの話は嘘なんです。

ともの　嘘？

小野寺　手紙に思ってもみないことを書いたっていうのは嘘なんです。

幸雄　嘘だ。さきさんが手紙に嘘を書いたのは嘘だと言うおまえこそ、ありもしない嘘をついてるんだ。

小野寺　嘘じゃないわ。
幸雄　ほうらやっぱり。
小野寺　なにが「ほうら」よ。
幸雄　だから、嘘じゃないんだろ。
小野寺　嘘よ、嘘なのよ。
幸雄　どっちなんだ。
ともの　だから、小野寺先生がそうじゃないって言ってるのは、さきちゃんがそうじゃないって言ったことはそうじゃないって
小野寺　そうです。吉野さんがそうじゃないって言ってるのはそうじゃなくって、それをそうじゃないって言ってるわたしは、そうじゃないことはないってことよ。
幸雄　なにを言ってるんだ、おまえは。
ともの　分からないひとね。だから
宝木　ストップ！　話が混乱してる。全然見えない。みんな落ち着いて。大体、誰なの？　おたく。いきなりシャシャリ出てきて嘘だのなんだのと言われてもさ、困るんだ、実際の話が。
小野寺　小野寺です。
宝木　小野寺？
ともの　だから、さきちゃんの高校時代の担任の
宝木　下は？
小野寺　下？
宝木　名前。
小野寺　園子です。
宝木　ソノコって、公園の「園」に子どもの「子」？
小野寺　ええ。
宝木　そうか。オノデラソノコと読むのか。マイッタ、降参。いやね、明日の結婚式の出席者の中におたくの名前があったんだけど、おれ、オノ・ジエンコと読むのかと思ってさ、変な名前って笑ってたんだ。（と、笑う）
小野寺　最低ね。
宝木　誰が？　え、おれ？
幸雄　（さきに）嘘なんでしょ。この女、ぼくたちが幸せになるのを妬んで、だからこんなデマカセを言ってるんでしょ。
さき　……
ともの　さきちゃん、黙ってちゃ分からないわ。
幸雄　（小野寺に）おい、彼女になにを吹き込んだんだ。
小野寺　なにも言ってないわ。
幸雄　もう終わったことじゃないか。
宝木　なに？　どういうこと？　ふたりの間になにかあったわけ？
幸雄　さきさん、こいつとはもう何年も前に

さき　知ってるわ。だから、いいの。そういうことじゃないの。
小野寺　吉野さんには好きなひとがいるのよ、あなた以外に。
幸雄　さきさん　……！
さき　違うの。そうじゃないって、そういうことじゃないって、先生にはさっきも話したでしょ。（幸雄に）なんだか不安だったの。トントン拍子にここまで来てしまって、こんなことってありっこない、いつか大きな落とし穴がって思ったら、その穴は自分で掘らなきゃなんておかしな気持ちにとらわれて、あんな手紙を。そうよ、だからわたし、ポストに入れたその後すぐに、慌ててお家に電話して、お母さんに、わたしの手紙が届いたら幸雄さんに見せないで、破って捨てて下さいってお願いしたのよ。
幸雄　嘘！
さき　嘘じゃないわ。
幸雄　そうか。おふくろがさきさんの言うとおりにしていればこんなことには。おふくろのヤツ　……
さき　ハイハイって言われたから安心してたのに。
幸雄　そう言えば、おふくろどうしたんだろう？　一緒に来たはずなのに。
宝木　知らないの？
幸雄　帰ったんですか。
宝木　そう、坂道を転がって。
幸雄　坂道を？
宝木　コロコロコロコロ。
小野寺　（さきに）なぜ？　どうして自分の気持ちを正直に言わないの？
さき　言ってるわ。言ってるでしょ、本当のことを。
ともの　誰なの？
さき　え？
ともの　誰なのよ、さきちゃんの好きなひとって。

垣根の向こうから松男がご機嫌で現れる。手に男の礼服一式。

松男　ああ、これはこれは、皆さんお揃いで。
宝木　いいねえ、マッちゃんは苦労知らずで。
ともの　なにそれ。
松男　錦ちゃんが、明日着ていくものがないって言うから、いま坂口さんのところで。
ともの　さきちゃん、明日の結婚式やめたって。
松男　ええっ？
ともの　嫌になったんだって、結婚。
幸雄　ちょ、ちょっと待って下さい、誰もそんなこと
ともの　だって小野寺先生がさっきから

幸雄　だからこんな女の言うことは
小野寺　なによ、こんな女って。
幸雄　女じゃないのか。
小野寺　あなたに「こんな」呼ばわりされる覚えはないって言ってるの。
幸雄　こんなこんなこんな。
小野寺　（重ねて）バカバカバカ。
松男　うるさい！　さき、どういうことなんだ。
ともの　さきちゃんは好きなひとがいるのよ。
松男　おまえじゃない。さきに聞いてンだ。
さき　なぜ？　どうしてそんなこと聞くの？　結婚式は明日よ。いまさらやめられるわけないでしょ。
松男　そんなことはない。おまえがどうしてもって言うんなら　……
宝木　マッちゃん、なに言い出すのよ。ダメだよ、そんな。おれ、明日のために大枚はたいて服買ったんだから。明日緊張しないために、今朝から精神安定剤打ってんだぜ、冗談じゃないよ。
松男　なんなんだ、あんた。
宝木　なに？　全然分からない、その質問。
松男　この際だからはっきり言わせてもらうけどさ。
宝木　言って、なんでも。この善意の男に不満があるなら。
松男　さっき、あんたが数珠を借りに来た時からずっと考えてたんだけど、いったい誰があんたに今度の仲人頼んだの？
宝木　えっ？
松男　えっ、じゃないんだよ。
ともの　あなたじゃないの？
松男　記憶にないんだ。
宝木　しっかりしてよ。マッちゃん以外に誰がいるのよ。
松男　それほんと？　ほんとにわたしがあんたに頼んだの？
宝木　奥さん、マッちゃん変！
松男　だって考えてみて。おれ、宝木さんとはもちろん知り合いよ。だけど月に一回、頭を刈ってもらうだけの、それ以上でも以下でもない関係。なのになんで仲人を　……？
ともの　だからわたし、なんべんも聞いたでしょ、なんでよりによって宝木さんなんだって。
松男　全然必然性がないんだよ。
宝木　マッちゃん、そりゃないよ。それじゃなんだかおれがゴリ押ししたみたいじゃない。あんたでしょ、あんたが頼んだんでしょ、急な話であれだけどって。頼まれたら嫌と言えない男だから、おれは。他のひとたちと違って、局長、怖くないから、おれは。だからでしょ、だからおれンとこにお鉢が回ってきたんで

しょ。必然性？　おれだってないよ、そんなもん。だけどマッちゃん。世の中、必然性だけで動いてるわけじゃないんだよ。おれが五年前にこの町に来たんだってたまたまだしさ。いまここでみんなでこうしていること。これ必然？　そうじゃないでしょ、偶然でしょ。偶然偶然。第一次世界大戦だってアレじゃない、いきなり話が大きくなるけどさ。あれもどっかの誰かがどっかの国の偉いひとをアレしちゃったことから始まったわけでしょ、偶然なんでしょ。そうなの。歴史はいつも瓢箪から飛び出した駒が動かしてンだから。

松男　いやまあ、ここまで来たらそんなことどっちだっていいんだけどね。

ともの　どっちだっていい話をなんでこんな時にするの？

松男　おまえだろ。さっきおまえが言ったからおれは妙に気になって

さき　やめて、もう。明日わたしは結婚するの。幸雄さん、いいんでしょ、それで。

幸雄　構わないんでしょ。

小野寺　もちろん。ぼくは最初から　……

幸雄　吉野さん。落ち着いてよく考えるの。あなたの人生はあなただけのものなのよ。

宝木　誰にも遠慮することはないの。前に進むことばかりが勇気じゃないわ。立ち止

幸雄　まって、振り返って、後戻りすることだって勇気なのよ。

宝木　尼寺へ行け、尼寺へ。

幸雄　なによ、急に。

小野寺　だってこんな、ものの道理の分からない、ひとの迷惑も考えないような女が教

ともの　師なんですよ。いいんですか、許されるんですか、こんなことが。

小野寺　だから教師は辞めるわよ。

小野寺先生　……！

小野寺　そうなんです。わたし、明日からジンバブエに行くんです。だから今日は吉野さんにお別れの挨拶を　……（言葉に詰まって涙ぐむ）

宝木　あ、揺れてる。

小野寺　え？

宝木　揺れてる揺れてる。

松男　（小野寺に）大丈夫です。携帯に電話がかかってくると、このひとはいつもこういうことを言って　……（と、言いながら座敷に上がる）

宝木　そうじゃない。（地面に耳をあて）何者かがこっちに　……

あきが息をはずませ現れる。

幸雄　かあさん。

あき　ああ、やっと着いた。まさかここまで来るのにこんなに時間がかかるだなんて。

幸雄　かあさん、なんで手紙を。

あき　なんのこと？

幸雄　かあさんだ、みんなかあさんが悪いんだ！

あき　なに？　わたしがなにを？
幸雄　帰れ！
あき　え？！　なにがなにやら　……
さき　（やって来て）この度はいろいろご心配をおかけしまして。（と、あきに）
幸雄　いいんだ、さきさん。もう終わったんだ。
あき　手紙って？
幸雄　シャラップ！
あき　うっ。
幸雄　終わったことは忘れるんだ。ぼくはそういう男なんです。雨降って地固まるって言葉もあるし。こんな句、知ってますか。「湖（うみ）わたる　風はなにいろ更衣（ころもがえ）」。
さき　湖わたる　風はなにいろ　更衣
幸雄　「湖わたる　風はなにいろ　更衣」。なんだか晴々とした気分になるでしょう。黒田杏子さんの作品です。なにか嫌なこと、忘れてしまいたいことがあると、ぼくはこの句を諳んじることにしてるんです。
さき　湖わたる　風はなにいろ　更衣
あき　湖わたる
幸雄　いいんだ、かあさんは。
あき　喋りたいんだよ、わたしも。

みんな、笑う。この凡庸なやりとりに救われて。

宝木　これにて一件落着か。（と、携帯を取り出し）ド・ラ・キュ・ラ。（と、プッシュして）ああ、もしもし。客の宝木照子、呼んでもらえますか。
松男　これは？　（と、さっきから見ていた星取表を、とものに示し）
とものさっき北島くんがインターネットでアレしたとか言って。
松男　いや、この最後のところ。
とものなに？
松男　ほら、三原山は９３年の６月に亡くなったって。
とものほんとだ。

さき、やって来て、それを見る。

とものそう言えば小川さん、どうしたのかしら。さっき水を持って来るって言ってそのまま　……
宝木　野郎、逃げやがったな。

まりえが駆け込んでくる。

まりえ　おかあさん、三原山さんが、
とものの　小川さんがどうしたの？
まりえ　キッチンで倒れてる！

暗くなる。

2

その日の夜もふけて。同じ場所。奥の襖が閉まっている。
縁側でさきが新聞を読んでいる。傍らに缶ビール。
三原山が垣根越しにさきを見ているが、さきはそれに気づかない。
風呂上りの松男が現れる。三原山、垣根の裏に隠れる。

松男　お前だったのか。
さき　なに？
松男　いや、冷蔵庫を開けたら、あったはずの缶ビールがなくなってたからね。
さき　ごめんなさい。一口飲んだだけだから。（と、缶ビールを差し出す）
松男　いいよ。スイカは誰が食べたのかな？
さき　スイカ、あったの？
松男　あったんだ、ひと切れ。岩村くんが持ってきた「おたべ」もなくなってた。なんにもないんだ、冷蔵庫に。いや、いいんだけどね。やっぱり貰うか。

さき、笑ってビールを手渡す。

松男　（飲んで）ああ、うまい。……三日月か。
さき　どうなるのかしら、日本。
松男　ううん？　まあ、どうにかするさ、ハシリュウもバカじゃないんだから。お前、風呂は？
さき　義姉さんは？
松男　錦ちゃんが明日のお式に穿いてくズボンの裾上げしてるみたいだから。
さき　すぐ済むんでしょ。あとでいい、わたしは。
松男　お前　……
さき　なに？
松男　好きな男がいたのか。
さき　……

松男　いや、いいんだけどね。まあ、生きてりゃいろんなことがあるよ。いろんなことが起こる。無理するもよし、しないもまたよし。わたしは時々考えるんだが、人生ってものは概ね、なるようにしかならないよ。そう思って生きてるとたまに、ほんとにたまになんだけど、思ってもみなかったような幸運に恵まれることがある。そう、こうして、お前がいなくなる前の晩にこんな話が出来るのも、お前はどう思ってるか知らないが、わたしにしたらちょっとした幸運だよ。だって、今までこんな話、したことなかったからね。ハ、ハ、ハ。なんだか柄にもなく語っちまった。（と、ビールを置き、立ち上がる）

さき　（ビールを手に取り）まだ入ってる。

松男　もういい。寝るよ。おやすみ。

さき　おやすみなさい。

松男　明日、晴れるといいがねえ。（と、去る）

さき、ビールを飲み干し、新聞を畳んで、立ち上がり、明かりを消して、出て行こうとして、垣根にひとの気配を感じる。

さき　誰かいるの？

三原山、顔を出す。

さき　そんなところでなにを？

三原山　アリを見てたんです。

さき　そんなのアリ？

ふたり、笑う。

さき　もうおからだの方は？

三原山　ええ。それでちょっと散歩を。

さき　こんな夜更けに？

三原山　わたしのような者には、ホラ、日中は暑いから。

さき　でも、東京に比べたらこっちの方がずっと涼しいでしょ。もうしばらくこっちにいらしたらいいのに。

三原山　そういうわけには　……

さき　どうして？　兄も義姉さんも三原山さんがいてくれたらきっと喜ぶわ。

三原山　田舎の暮らしは性に合わないんですよ。相撲取りになったのもそのためで。別に、なりたいからなったわけじゃなく、ただ、一年の大半を巡業巡業で明け暮れする、そんな生活に憧れて、捨てたんですよ、田舎を。いまさら歳をとって、体を壊したからといって、生まれ故郷で暮らそうなんてむしが良すぎます。

町も変わった。さきちゃんが溺れてたあの速水川も、いまはあんな立派な堤防が出来て　……

さき　そこにそうしていると　……

三原山　え？

さき　暗いから　……

三原山　……

さき　二十年前の三原山さんが帰って来たみたい。

三原山　確かあの時、十両に上がったら国技館に呼んでやるって約束したっけが。

さき　横綱でしょ、横綱になったらって。

三原山　まさか、そんな大それたことを　……

さき　なめてたのよ、相手が子どもだと思って。

三原山　（笑って）　……

さき　だからでしょ。だからその柿の木の下で土俵入りの真似なんかしてくれたんでしょ。

三原山　柿の木？

さき　ええ、その柿の木の下で。

三原山　そうだよね、これ柿の木なんだよね。わたしが四股を踏むと、この柿の木が揺れて葉が騒ぎ、上から真っ赤に熟れた柿の実がバラバラ落ちてきたんだよね。

さき　ううん、柿の実は

三原山　落ちてきたでしょ、バラバラって言うとアレかも知れないけど。

さき　だって夏だもの。柿はまだ　……

三原山　夏？

さき　四年生の夏休みだったんだもの、あの時は。

三原山　そうだ。言われてみれば確かにあれは夏の巡業中。東北を回って新潟に入り、佐渡に渡って、直江津、中郷。飯山まで来て、久しぶりに千曲川を見たら、なんだか無性に、生まれ故郷の千石谷に帰りたくなっちまって。みんなが寝静まったこんな夜更けに、部屋からこっそり逃げ出したんだ。

さき　逃げ出した？

三原山　ええ、もう相撲取りなんかやめるつもりで。十年とって三段目と幕下を往ったり来たりじゃ。図体だけは幕内の関取衆にもひけをとらなかったが、とにかく弱かった。でもあの日、川で溺れるさきちゃんを助けて、そしたら、もう少し相撲がとれそうな、もう少し強くなれそうな、そんな気がして。きっと人助けをしたことがなにか自信になったんでしょう。それに、あの時交わした約束が……。あれから六年とって時々、そう、勝ち越しがかかった一番なんかになると、客席のどこかからあの時の、「ヨイショッ」というさきちゃんの声が聞こえてきて　……。まあ、それで勝てるほど相撲は甘かないんですが。でも、病気さえしなきゃ十両までは　……

さき　土手の真ん中あたりに赤いケシの花が咲いてて。いま見るとそんなでもないけ

れど、子どものわたしにはずいぶんな急勾配に見えたわ。一歩降りると二歩下がり、三歩も降りたらずるずると下の川まで落ちてしまいそうな。だから、花が咲いてるところまでたどり着くには、ほとんど決死の覚悟が必要で　……。わたしあの時、きっと死んでもいいと思ってたんだわ。

三原山　なぜ？

さき　寂しかったんでしょ。忘れられないわ。ゆっくりと、周りに生えてる草なんか掴みながら、足場を確かめながら降りていってもう少し、あと5センチくらいで花に手が、指が届きそうなところまで近づいたのに、右足を滑らせて、ズルズルッと下まで落ちていく時の、哀しくて悔しくて、でもちょっとスリルなあの感じ。落ちてくの、ズルズルズルズル。

三原山　覚えてる。川からここまで運んでくる間、わたしの背中でさきちゃんは、うわ言のように、赤い花、赤い花ってずっと言ってた。だから、これ　……（と、ポケットから赤い花を取り出す）

さき　三原山さん。

三原山　結婚式のお祝いになにを贈っていいか分からなくって、さっき横になってた時にふっと思い出して、それでいま　……

さき　わたしの太った神様。

三原山　太った神様？

さき　逃げましょう。

三原山　逃げる？

ともものが、ズボンを持って現れるが、場のただならぬ気配を感じて、そっと隠れる。もちろん、ふたりはそれに気づかない。

さき　わたし、待ってたの。三原山さんが来るのをずっと待ってた。亡くなったって聞いた時にはびっくりしたわ。相撲協会に問い合わせたの。三年前よ。でも、わたしの太った神様はいつかきっと、死んでも現れるって信じてた。だって、神様なんだもん。

三原山　死んでない死んでない、わたしは生きてる。六年前に死にはぐったことは確かだが、ほら、この通り、二本の足だってちゃんとある。

さき　いいの、死んでたって生きてたって。そんなことはどうでもいいの。現にこうして

三原山　そう。現にこうして。

さき　だから、ね、明日が来る前に、どこでもいいわ、一緒に逃げて、わたしを助けて、あの時みたいに。

三原山　落ちつくんだ、落ちついて。わたしをよく見てご覧。太ってるかい？　これでもわたしはさきちゃんの太った神様かい？

さき　太ってるわ、兄さんよりも。

三原山　そりゃ、マッちゃんよりは太っちゃいるが。そうだよ、明日結婚するきみのフィアンセや、そうだ、あいつあいつ、あの写真屋の男に比べたら。

さき　よして。わたしはデブ専じゃないの。いくら痩せても三原山さんはわたしの太った神様。わたしを救うことが出来るのは、三原山さんしかいないの。だから……

三原山　なぜ？　なにがそんなに　……

さき　分からない。自分でも分からない。でも、寂しいの、苦しいの、生きてることが、生きていくことが。

ふたりのやりとりを立ち聞きしていたともの、ここが出番と、そ知らぬ態で現れる。

ともの　ああ、小川さん。お部屋にいないから　……。裾、少し上げてみたからちょっと穿いてみて。多分大丈夫だと思うけど。

三原山　どうも、お手数かけまして。

三原山、ズボンを受け取って、奥に消える。

ともの　坂口さんの亡くなった旦那さん、若い頃はバスケットの選手だったんだって。１５センチも裾上げしちゃった。大男に大女。冗談じゃないわ。

さき　義姉さん、お風呂先に入って。わたしまだやることあるから。

ともの　なにかあるんなら言って、わたし手伝うわ。

さき　いいの。手伝ってもらうほどのことでもないから。

ともの　そう。じゃあ。（と、行きかかると）

松男　（現われて）えらいことになったよ。

ともの　なに？

松男　戦争が始まるってさ。

ともの　どこで？

松男　ここ、日本。いまテレビでハシリュウが

ともの　いつから？

松男　さっきヤルって言ったってことは、今からってことじゃないの？

ともの　ダメよ、そんな。

松男　わたしに言われても困るんだよ。

ともの　だって明日、さきちゃんの結婚式よ。

松男　だからえらいことになったって。

ともの　もう。嫌になっちゃうなあ。

さき　きれいな三日月。兄さん、明日はきっと晴れるわね。

暗くなる。

3

翌日のお昼過ぎ。結婚式当日。同じ場所。
舞台中央に三脚が立っていて、暗幕を被ったカメラが乗っている。
まりえが木の脇に。学生服を着た俊介が、縁側に座っているお腹の大きな照子に、
手にしたカメラの操作を説明している。

俊介　ピントは自動になってるんで、ここんとこ押すだけでいいですから。
照子　押すだけでいいの？
俊介　ちゃんとフレームの中に入れてくれないとアレですけど。
照子　分かった。
俊介　お願いします。（と、まりえの隣に移動）
照子　（カメラを構えて）ほんとにオスだけでいいのね。
俊介　はい。
照子　もう少しふたり離れてくれる？　もう少し、もっと。
俊介　こんなに離れて、ふたりちゃんと入ります？
照子　だってオスだけでしょ、メスは写さなくっていいんでしょ。な～んちゃって。
　　ハ、ハ、ハ。（と、笑う）

俊介、まりえ、憮然。
坂口が奥から現れる。

まりえ　坂口さん、写真撮ってもらえます？
坂口　いいわよ。
照子　なによ。撮るわよ、わたしが。
まりえ　いい、おばさんは。（と、カメラを奪い取り）すみません、お願いします。（と、
　　坂口に渡す）
照子　感じ悪いわね、あんた。
まりえ　お互い様でしょ。（と、俊介の隣に）
坂口　はい。じゃあいきまあす。まあ、可愛い。（と、シャッターを押す）
俊介　ありがとうございます。（と、カメラを受け取りに）
照子　わたしも撮ってよ。
俊介　いいですよ。じゃ、坂口さんと一緒に。

坂口　わたしも？　すみません。（と、照子の隣に座る）
照子　チュンスケくんもおいで。
俊介　シュンスケです。
照子　チュンスケの方が可愛いじゃない。チュンチュン。ほら、おいで。ほらほら。
俊介　じゃあ　……。（と、カメラをまりえに渡して、二人の方へ）
まりえ　……（怒り心頭）
照子　真ん中真ん中。（と、俊介を間に入れる）

垣根の向こうに、宝木が現れる。

宝木　石、いるか。
照子　石松くーん。親方が呼んでる。（と、大声で）
宝木　どうなってんだ、殿山のヤロー。一時に来いって言ったのに、カメラだけ来たってしょうがねえんだよ。
まりえ　宝木さん、これお願いします。（と、カメラを宝木に渡して、座敷に上がり）
俊介　ムカツク。（と、奥に消える）
照子　吉野さん。（と、まりえを追う）
坂口　なに、あの子。
照子　若いから。
坂口　わたし、今日の仲人よ。そのためにわざわざ田舎から、こんな大きなお腹抱えて来てるのよ。あの子、ここんちの子でしょ、わたしに感謝しなきゃいけない側の人間でしょ。もう少し気の使い方があるんじゃないの。
宝木　甘いから、マッちゃんは。ね、坂口さん。優しいでしょ、マッちゃんは。
坂口　ええ。大家さんにはいつもよくしていただいて。

幸雄とあきが奥から現れる。

あき　ああ、宝木さん。この度はいろいろお世話になりまして。
宝木　いやいや。戦争も始まりましたし、こういう時はみんなで助け合わなきゃ。
幸雄　坂口さんもお忙しいのに。
坂口　こちらの方こそ。わたしのような者が出席していいのかどうか、ちょっと考えたんですけど、でも、よかったです、お邪魔させていただいて。とってもいいお式で。いかにも手作りの、あったかい心がこもってて。感激しましたわ。やっぱりこういうものは、心ですわよね。
照子　（坂口が言い終わらぬうちに）ちょっと、早くしてよ。
宝木　え？
照子　写真写真。
宝木　ああ。（と、気づいて）

坂口　（幸雄とあきに）どうですか、ご一緒に。
幸雄　ああ、どうも。（と、坂口たちの後ろに）
坂口　お母さんはお小さくていらっしゃるから前の方が。
あき　（笑って）すみません。（と、ふたりの間に座る）
宝木　これ、どうやればいいの？
照子　押すだけでいいのよ、押すだけで。
宝木　じゃ、メスはいらないわけ？
坂口　いやだ、宝木さんたら。（と、笑う）
照子　下らない。（と、吐き捨てる）

三原山が奥から現れる。

宝木　（三原山に）おい、邪魔だよ。あんたあんた。そんなとこにいたら怖いだろ、背後霊みたいで。

三原山、脇に退く。

宝木　いくよ。（と、シャッターを押す）
あき　どうも。いい記念になるわね。（と、幸雄に）
坂口　（三原山に）やっぱり少し大きかったかしら。
三原山　そんなことはないでしょう。上着の袖丈はあってるし、ズボンの裾も　……
宝木　（照子に）おい、石はどうしたんだ。
照子　なんの用？　石松くんに。
宝木　殿山写真館に行かせるんだよ。
照子　だっていないんでしょ、殿山さんは。
宝木　だから、女房を「殺すぞ」って脅して、殿山にこっちに来るように電話させるんだよ。
照子　またバカ言って。
宝木　それくらいしなきゃ来ないんだから、あいつは。
照子　ちょっと手貸して。
宝木　なに？
照子　トイレ。

照子、宝木に手を借りて立ち上がり、奥に消える。

坂口　いつなんですか？　予定日は。
宝木　嘘嘘。
坂口　嘘？

宝木　その気になってるだけですよ。ロボットなんだから、あいつは。
あき　うわっ。（と、驚く）
幸雄　冗談にきまってるだろ。
宝木　なんたって戦時中だから。明るく明るく。ハ、ハ、ハ。
坂口　もう、宝木さんたら。（と、笑う）

それに付き合って、幸雄とあきも笑う。

三原山　（宝木に）写してやろうか。
宝木　写真？　撮れるの？
三原山　足はなくても指はあるから。
宝木　言うね。（と、カメラを渡す時に、三原山の手に触れ）あ、冷てぇ。
あき　うわっ。
幸雄　だから冗談だって。宝木さんの言うことはみんな冗談なんだから。
宝木　戦争戦争。
坂口　もう、宝木さんたら。（と、笑う）

幸雄とあきも、律儀に再びそれにお付き合い。
石松が奥から足早に現れる。

石松　親方。
宝木　どこに行ってたんだ。
石松　すみません、トイレに。朝からずっと下痢気味で。
宝木　悪いけどさ、ちょっと殿山のところに行って
石松　分かりました。（と、奥へ）
宝木　おい、まだなにも言ってないだろ。
石松の声　（奥から）奥さんから聞きました。

松男が奥から現れる。

松男　なに、まだ殿山さん来てないの？　岩村くん、何時だっけ、電車。
幸雄　いや、まだ三十分くらいありますから。
坂口　あ、ちょっと。
松男　え？
坂口　襟元が。（と、松男に近づいて、直す）
松男　いやいや。

とものが奥から現れる。

ともの　なにしてンの？
松男　あ、いや、ちょっと襟元が。ハ、ハ、ハ。（と、戸惑いを笑ってごまかす）
ともの　そうじゃなくて、殿山さん殿山さん。
宝木　いまうちの石松がヤツの家に火つけに行ったから。
あき　うわっ。
幸雄　うるさいな、いちいち。
坂口　もう、お母さんたら。（と、笑う）
ともの　（松男に）ね、小川さんと一緒のところ、撮ってくれる。小川さん、カメラ。

三原山が持っていたカメラは、とものを経由して松男に。とものは、三原山に並ぶ。

松男　なに、裸足で撮るわけ？
宝木　いいんだよ、どうせ三原山の足は写らないんだから。
あき　うわっ。
幸雄　いい加減にしないと怒るゾ、ほんとに。
坂口　もう、幸雄さんたら。（と、笑う）
ともの　うるさいわねえ。
松男　はい、笑って笑って。いくよ。（と、シャッターを押す）
ともの　あ、目つぶっちゃった。ごめん、もう一枚。
松男　いいよ。十分十分。

奥から小野寺が現れる。

小野寺　みなさん、すみません。わたし、電車の時間があるんでお先に失礼させていただきます。
宝木　なによ、ジエンコ先生。ジンバブエに行くのは明日に変更になったんじゃないの？
小野寺　いま航空会社に電話したら、戦争の影響でダイヤも乱れてるし、ケツベンもあったりするから早めに来た方がって言われたんです。
宝木　ケツビンでしょ。
小野寺　ケツビン？
宝木　飛行機が血のついたうんこするわけじゃないんだから。
小野寺　嫌だ。わたしいままでずっと　……
宝木　学校でいったいなにを教えてたのよ、ジエンコ先生は。

みんな、笑う。

小野寺　失礼します。（と、帰ろうとする）
松男　小野寺先生。せっかくだからみんなで写真を。
小野寺　でも時間が　……
松男　すぐ終わりますよ。あれ？　さきはどうしたのかな。
幸雄　呼んで来ます。
宝木　ついでに照子も。トイレにいるから。

幸雄、奥に消える。

三原山　マッちゃん、カメラ。おれが撮るから。
ともの　ダメよ、小川さんは一緒に入らなきゃ、主賓でしょ。
三原山　主賓だなんて。
ともの　だって、小川さんがいなかったらさきちゃんの今日のこの日はないんだもの。
松男　じゃ、あいつに頼もう。
ともの　あいつって、北島くん？
松男　そう。
ともの　坂口さんでいいじゃない、背も高いし。
坂口　いいですよ、わたしでよければ。
松男　坂口さんはアレだろ。
ともの　なによ、アレって。
松男　こういう器械類は苦手なんだよ、坂口さんは。
坂口　ええ、ほんとのことを言うと　……
松男　あいつでいいよ、関係ないんだからあいつは。
ともの　ダメよ、あんな小さい子。
松男　なんで？　どうして背の高さにこだわるの？　写真撮るのよ、棚を吊るんじゃないんだよ。
小野寺　すみません、わたし時間がないんで。
三原山　いい、おれが撮るから。最初にまずおれが撮って、それから順々に交代すればいいんだから。
宝木　そうだよ、早くしようよ。戦争始まっちゃってるんだからさ。
ともの　（大声で）まりえ、写真撮るわよ。
松男　さあ、並んだ並んだ。
あき　わたしはどこに？
三原山　いいんですよ、適当で。あとで写真屋がちゃんとしたの撮るんだから。
坂口　お母さんはお小さくていらっしゃるから　……
ともの　そうね。大きいひとは後ろの方にいってもらって。

ともの、あき、最前列に座る。宝木も前に。

三原山　おい、ダメだ。後ろ後ろ。（と、宝木に）

宝木　おれ、仲人よ。

三原山　そこは新郎新婦が座るんだよ。

宝木　分かったよ。

ともの　あなた、なにしてるの？　（と、坂口と並んで後ろにいる松男に）

松男　だから、おれは大きいし。

ともの　なに言ってンの、花嫁の父でしょ。

松男　父じゃないよ。

ともの　父親代わりでしょ。さきちゃんの隣に座らなきゃ。

幸雄とさきが現れる。

幸雄　お待たせしました。

坂口　おめでとう。（と、持っていた紙ふぶきをまく）

ともの　ちょっと坂口さん、もう。お部屋が汚れるでしょ。

坂口　すみません。

松男　なんでそういうこと言うの？　せっかく坂口さんがふたりのために

ともの　あとで掃除するのはわたしなのよ。あんたやってくれるわけ？

松男　やるよ。やりゃいいんだろ。

小野寺　すみません。わたし電車の

宝木　そうだよ。夫婦喧嘩なんか見物させるなよ。ジエンコ先生は時間がないんだから。

小野寺　小野寺です。おのでらそのこ！

三原山　ふたり、前。そこに並んで。

幸雄とさき、前に並んで座る。

まりえと俊介が現れる。

ともの　ああ、まりえ、こっちこっち。（と、前に来いと指図する）

宝木　ちょっとちょっと。ガキが前で仲人のおれが後ろってことはないんじゃないの？

松男　そうだよ、まりえは後ろでいいよ。

ともの　さきちゃん、ブーケは？

さき　置いてきた。

ともの　ダメダメ。花嫁さんにブーケがなくっちゃ。部屋？

さき　ええ。

ともの　まりえ、さきちゃんの部屋行って　……

まりえ、奥へ。

奥で。

照子の声　ちょっと！　危ないでしょ！

三原山　そうか、あの女がいるのか。ええっと、三列になってもらえますか。前から５・４・２と。

松男　５・４・２ってことは？

三原山　だから、前はそのままで後ろが　……

照子が現れる。

ともの　照子さん、まりえがなにかしたの？

照子　ぶつかってきたのよ、わざと。

松男　まさか。

照子　もしものことがあったらどうしてくれるの？　あとでいくら謝ってくれても、取り返しがつかないんだから。

ともの　ごめんなさい。

照子　もう少し、思いやりとか命の尊さとか、そういうことをアレした方がいいんじゃないですか？　（宝木に）手。（と、前に座ろうとする）

三原山　あんた後ろだ、後ろ。

照子　なんで？

三原山　前はもう定員いっぱいなの。

照子　わたし、こんな体よ。

三原山　こんなもあんなも、ダメなものはダメなんだよ。

まりえ、ブーケを持って戻って来る。

まりえ　さきちゃん。

さき　ありがとう。（と、受け取る）

三原山　もう少し、前の５人くっついて。

ともの　小野寺先生はひとつ前に来た方が。北島くん、後ろ。

松男　それがいい。小野寺先生ともこれで当分お会いできなくなるし、ついでに、まりえも後ろに行って坂口さんとチェンジして。

ともの　坂口さんはいいわよ、大きいんだもの。

坂口　ええ。わたしはいちばん後ろで。

三原山　いや、そういう風にふたりが並ぶのはアレだから、そっちのふたりと代わった

方がいいな。
宝木　冗談じゃないよ。なんでおれたちがいちばん後ろに引っ込まなきゃいけないの？　仲人なのよ、俺たちは。
三原山　だっておかしいもの。関係のないふたりがあんな風に。バランス悪いんだよ。
宝木　バランスだ？　あんたさっき適当でいいって言わなかった？　あとでちゃんとしたの撮るからって。
小野寺　すみません、わたし電車の
照子　ああ、もうダメ、立ってられない。
宝木　そうだよ。電車だって妊婦には席譲らなきゃいけないんだから。
松男　分かった。わたしが後ろに行くよ。ほら、お前も。（と、とものに）
あき　じゃ、わたしも。
幸雄　いいよ、かあさんは。後ろに行ったら埋もれちゃうんだから。
宝木　（照子に）お前、ユッキーの隣に。
松男　錦ちゃん、俺たちふたりは後ろで並んだ方がいいんだよね。
三原山　そう、バランス的には。じゃ、これで。（と、撮ろうとする）
松男　みんな、笑って笑って。

今の陣形は、前列は向かって左から、あき、照子、幸雄、さき、宝木。二列目は左から、坂口、小野寺、まりえ、俊介。三列目に松男、ともの。

三原山　ちょっと待って。お母さんが、浮いてるな。
あき　浮いてる　……
三原山　どうしよう。後ろに行ったら埋もれるし、真ん中に入って貰うか。
あき　真ん中？
三原山　新郎新婦の間に。
松男　ダメだよ、そんな、ふたりの仲を裂くようなことしちゃ。
三原山　だって凄くバランス悪いんだから。
松男　（前に回って、並びを見る）ああ。ほんとだ。こりゃ最悪だわ。
あき　わたしはどこに？
宝木　もう！　戦争始まってンのよ。バランスなんかにこだわってる場合じゃないんだから。
三原山　分かったよ。
照子　ちょっと待って。石松くんが　……
宝木　石なら殿山のところに。
照子　まだいるのよ、トイレに。石松くーん。（と、叫ぶ）
三原山　（舌打ちし）まだいたのか。
あき　あのう、わたしはどこに？
三原山　じゃ、こうしよう。やっぱりお母さんは真ん中に入って

松男　だからダメだって、それは。
三原山　だから、新郎新婦を裂かなきゃいいんでしょ。おれの思い通りにさせて、頼むから。５・４・３でいくよ、５・４・３。
松男　５・４・３てことは　……
三原山　ダメだよ、マッちゃん、勝手に動いちゃ！　まずお母さん、そこ、新郎の隣。さっさと動く。それでお前はこっち。（と、宝木に左端に移動せよと指で指示）
宝木　なんだ、お前って。
三原山　さっさと動く！　（照子に）奥さんズレて。逆だ逆。そこへあいつが入るんだから。
宝木　なんだ、あいつって。
ともの　宝木さん邪魔、立たないで。
三原山　それからそのマッちゃんの娘、後ろ。親父とおふくろの間に入りゃいいんだよ。前列正座。二列目中腰。違う、そうじゃなくて、座って膝を立てるの、そう、坂口さんみたいに。
俊介　すみません、ぼく、いまちょっと膝をケガしてて。
三原山　うるさい。我慢しろ、それくらい。（宝木に）お前、前列正座って言っただろ。お前って言うな。おれには宝木陽之助ってちゃんとした名前があるんだ。
宝木　ヨーノスケだって。（と思わず笑う）
小野寺　ジエンコ先生。なにがおかしいの？。
宝木　小野寺です。オノデラソノコ！
小野寺　早く座ってよ、わたしきついんだから。
照子

奥から石松が現れる。

照子　早く早く。
石松　すみません。
三原山　そっちじゃない、二列目のそっち（左端）。しゃがむしゃがむ。隣を見りゃ分かるだろ。
宝木　（石松に）おまえ、殿山のとこへ行ったんじゃなかったのか。
石松　すみません、腹具合が
三原山　そこ、勝手に喋るな！　お母さん、もう少し腰上げて、隣と頭の高さを合わせるの。

前列左から、宝木、照子、あき、幸雄、さき。二列目に、石松、坂口、小野寺、俊介。三列目に、松男、まりえ、ともの。

ともの　小川さん、うちのひとと代わっていい？
松男　いいよ、このままで。こっちの方がバランスいいんだから。

ともの　小川さん、いいでしょ。わたし、右の肩が少し下がってるの。こっちにいるとこうなってカッコ悪いのよ。だから　……

三原山　いいですよ、どっちでも。

ともの　ほら、代わって。

松男　メンド臭いなあ。（と、ふたり、位置を変える）

俊介　すみません。ぼく後ろに行っちゃダメですか。

全員　ダメ！

三原山　マッちゃんと奥さん、５センチくらい下がって、娘を少し前に、そう、いい感じ。じゃあ、いくよ。

ともの　坂口さん、もう少し低くならない？

坂口　すみません。（と、動いた拍子に、前の照子の背を押してしまう）

照子　ちょっと、押さないでよ。

坂口　ごめんなさい。

三原山　ダメだ、動いちゃ。

幸雄　あのう

三原山　なに？　（と、苛立って）

幸雄　さきさんを中に入れた方が。

さき　いいわよ、わたしはここで。

幸雄　おかしいよ、さきさんが端っこなんて。

松男　確かに。さきは今日の主役なんだから端っこはないよ。

あき　じゃ、わたしと代わって。（と立ち上がろうとする）

三原山　いいの、お母さんは真ん中で。あんたが端っこにいくとバランス悪くなるんだから。

あき　ワシはそんなに　……

小野寺　すみません、わたし時間が

幸雄　時間時間って、お前、何時の電車に乗るんだ。

小野寺　だから３５分の

幸雄　まだ２０分もあるじゃないか。

小野寺　荷物を取りに一度家に帰らなきゃいけないの。

幸雄　なんで持ってこなかったんだ。

小野寺　なんであなたにそんなこと言われなきゃいけないの。

宝木　早くしろよ。このズボン、買ったばっかりなんだから。

三原山　分かった、こうする。新郎新婦、立って。真ん中のふたりと代わろう。

ともの　ダメダメ。なんで坂口さんが前に行くの？　大きいひとは後ろって決めたでしょ、さっき。

松男　いいじゃないか、前は座るんだから。

坂口　そんなにおっしゃるんなら、奥さんが前に行かれたらどうですか。いいです、わたしはいちばん後ろで。どれだけ下がったってわたしは写るんですから。

（と、激しく）
松男　まあまあ、そうおっしゃらずに
ともの　行くわよ、行きゃいいんでしょ。あなた。
松男　え？
ともの　前よ、前。
松男　ダメだよ、おれが行ったら5・4・3のフォーメーションが
小野寺　わたしもう帰りますから。
ともの　ちょっと、小野寺先生。
俊介　ぼくも帰ります。
まりえ　なに言ってンの。
俊介　だっておれ関係ないじゃん。膝だって痛いしさ。やってらンないよ。（と、出て行く）
まりえ　待ってよ、北島くん。（と、追いかける）
ともの　まりえ。
松男　追いかけろ追いかけろ。なにやってンだ、まったく。

ともの、ふたりを追いかける。

宝木　ほれみろ、お前がバランスバランスなんて小うるさいこと言ってるから。
あき　ワシが悪いだ。バランス悪いワシさえいなきゃ。ワシは浮いてるだ。どうせワシは邪魔モンだ。ワー。（と、泣いて出て行く）
幸雄　かあさん。
松男　おいおい、どこへ行くんだ、きみまで。
幸雄　すぐにひがむんです、おふくろのヤツ。
小野寺　吉野さん、分かったでしょ。これがこの男の正体よ。
幸雄　なんだ、正体って。
小野寺　あなた、結婚したんでしょ、これから吉野さんと一緒に暮らすんでしょ。なんで大切な奥さんほったらかしにしてお母さんを追いかけるの。
幸雄　関係ないだろ、お前には。
小野寺　心配なの、わたしは吉野さんが。
幸雄　さきさんの心配はおれがする！　大体、なんだ、お前は。昔の男の結婚式によく出席出来るな。どういう神経してンだ、いったい。
小野寺　だから帰るって言ってるでしょ、さっきから。
幸雄　邪魔だ、どけ！　かあさ～ん。（と、出て行く）
小野寺　吉野さん、頑張るのよ。なにかあったら連絡して。ジンバブエは遠いけど、空はひとつよ。先生と吉野さんはつながってるの、永遠よ。じゃ。（と、去る）
宝木　マッちゃん、どうすンのよ。こんなヤツ（三原山）にカメラ持たせるから
松男　なに言ってンの。原因は殿山さんでしょ。あのひとさえ時間通りに来てくれて

たらこんなことには。そうだよ、そもそもあんたがあんな男に写真を頼まなきゃ

照子　麻雀の借りがあるのよ、殿山さんに。だから

宝木　シャラップ！　ビー・サイレント！

松男　宝木さん、どういうことよ、それ。

坂口　すみません、わたしも　……

松男　ちょっと坂口さんまで。待って下さいよ。

坂口　だって、みなさんいらっしゃらないし。

松男　すぐに戻ってきますよ。殿山さんだってもうすぐ

宝木　石、殿山に電話！

石松　電話番号は？

宝木　自分で調べろ、それくらい！

石松、庭におりる。

宝木　どこへ行くんだよ。

石松　だから電話を

宝木　バカ。ここんちの電話借りりゃいいじゃないか、このバカタレが！

石松　すみません（と、奥に消える）

ともの　（戻って来て）あら、ずいぶんひとがいなくなったわね。

松男　あいつは？

ともの　北島くん？　電話してる。

松男　ダメだよ、電話しちゃ。

ともの　どうして？

坂口　わたし、やっぱり　……

松男　坂口さん。

坂口　そろそろ局長さんのお葬式のお手伝いに行かないと　……

ともの　ふたりでなにコソコソやってンの。

松男　なんにもしてないよ。坂口さんが帰るって言うから　……

石松　（戻って来て）すみません、電話使ってるんで。

宝木　能無し！　役立たず！　オタンコナス！

石松　……

照子　ちょっと、手を貸して。

石松、宝木を制して、照子に手を貸す。

照子　（立ち上がり）石松くん、ここまで言われてもう我慢することないわ。行きましょ。

石松　はい。
宝木　きみたち、なによ、その手は。

照子と石松は、しっかり手をつないでいる。

照子　くっついてンの。
宝木　接着剤で？
照子　そう。だから離れられないのよ、もう。わたしたち、今までいったいなにを悩んでいたのかしら。
石松　親方、いろいろお世話になりました。
照子　いいのよ、こんなひとに挨拶なんかしなくても。
宝木　うん？　まさかそのお腹の子どもは　……、石！
照子　やっと気がついたのね。そうよ。父親は石松くん。さようなら。
石松　失礼します。
宝木　（呆然として）　……

ふたり、奥に消える。

ともの　宝木さん、追っかけなくていいの？
宝木　あっ、震えてる。
ともの　なに？
宝木　震えてる震えてる。
松男　また？
宝木　寒いんだよ。おお、寒い。照子！　（と、ふたりを追いかける）
ともの　いい歳して、なにやってンだか。
松男　冗談じゃないな、仲人までいなくなっちゃってもう。おい、お茶。
ともの　お茶でいいの？
松男　そうだな、ビールでも飲むか。錦ちゃんもそんなとこにいないでさ。
ともの　戦争、どうなったのかしら。（と、奥に行こうとすると）
坂口　奥さん、困るんです。
ともの　え？
坂口　わたし、大家さんとはなんでもないんですから。そんな目で見られたらわたし。今でもわたし、亡くなった主人のこと愛してるんです、忘れたことなんて一度もないんです。わたしは奥さんとは違うんです。おかしな誤解をしないで！
（と、興奮して激しく言い放ち、足早に去る）
松男　坂口さん。
ともの　なによ、あの女、言うだけ言って。ちょっと待ちなさいよ。
松男　おい、やめろ。（と、止める）

ともの　離して。なによ、奥さんとは違うって、どういうことよ、いったい。（と言いながら坂口のあとを追う）

松男　ともの、やめろって。（と、これまたあとを追う）

三原山　……そして誰もいなくなった。

さき、笑う。

三原山　ああ、やっと笑った。ずっと待ってたんだ。（と、カメラを構える）

さき　写真なんか撮ってる時間なんかないわ。荷物持って来る。

三原山　荷物？

さき　このすきにふたりで逃げるの。わたしもずっと待ってた。（と、ブーケを投げ捨て、奥に消える）

三原山　（見送って）　……太った神様か。さきちゃん、おれはそんな男じゃねえ。死に損ないの、食いっぱぐれの、今日も明日もねえ世間の屑だ。今から二十年前、そこの速水川であんたを助けた、その思い出だけを支えに今日までなんとか生き延びてきたが、これ以上は。会えてよかった。もう思い残すことはござんせん。手前勝手な言い草だが、この五日間のことは夢だと思って、きれいさっぱりおいらのことは　……。さきちゃんには明日がある。（と、カメラを縁側に置き）皆さん方にはいろいろお世話になりました。三原山錦一、これにておいとま致します。（と、奥に向かって一礼し）　……ああ、いい風だ。（と、歩いて、垣根まで行くと）

殿山が現れる。

殿山　ああ、すみません、遅くなりまして。

三原山　なんだよ、あんた来たの？

殿山　そりゃ仕事だから。お金がいるんですよ。この秋から娘がアメリカに　……。あ、これ昨日話しましたね。なんだかわたし自慢してるみたいで。へ、へ、へ。（と、笑いながらカメラの暗幕の中に頭を入れる）

三原山　いいんだよ、それ。

殿山　（顔を出し）なにか言いました？

三原山　見て。誰もいないでしょ。のんきに写真なんか撮ってる場合じゃなくなったんだよ、みんな。

殿山　あなたがいるでしょ。

三原山　おれ？　おれはだって関係ないもの。

殿山　いいですよ。

三原山　なに？　なにがいいの？

殿山　すみません、ちょっとそこの縁側に。

三原山　なに、おれを撮るの？
殿山　だってあなたしかいないから。
三原山　おれ撮ったってしょうがないでしょ。関係ないんだから、おれは。

さきが旅行鞄を持って、戻って来る。

殿山　あ、花嫁さんが来た。
三原山　さきちゃん。
さき　関係あるわ。あるでしょ、わたしたち。
殿山　よかったよかった。これで絵になる、金になる。ハイ、ふたり、そこに並んで。
三原山　ダメだって、おれは。
さき　いいの、これでいいの。写真だけでも　……（と、三原山の手を握る）
殿山　ああ、それいい、すごくいい。写真さえ撮ってしまえばこっちのもの。はい、ふたりこっちを向いて。ここ見てください。鳩が出ますよ。

ふたり、笑う。
殿山、シャッターを押す。と、ピカッと空が光って。
大地を揺るがすような轟音とともに、さきと三原山の笑顔を残しつつ、ゆっくり暗くなる。

エピローグ

同じ場所。しかし、あの庭の木一本を残して、他は跡形もなくなっている。
宝木が、地面に顔をこすりつけるようにして、四つん這いで動き回っている。
雲が流れている。あれからどれほどの時間が過ぎたのか、それは分からない。

宝木　あ、アリだ。いたいた、動いてる。よかった。生き残ったのはおれだけじゃなかったんだ。ハ、ハ、ハ。

三原山が現れる。結婚式の時に着ていた上下を手に持って。

宝木　ミ、三原山！　生きてたのか。
三原山　（あたりを見回し）おまえだけ？
宝木　え、ちょっと待って。
三原山　そうか。こいつしかいないんならしょうがねえか。

宝木　おまえがいるってことは、ひょっとしておれも（幽霊）　……？
三原山　悪いけどさ。これ（と、礼服上下を示し）
宝木　（あたりを見回し）ここどこよ。
三原山　これ、坂口さんに返しといてくれるかな。（と、宝木に差し出す）
宝木　嘘嘘。死ぬわけないでしょ、おれが。
三原山　頼むよ。
宝木　だっておれは、七つの心臓を持つ男なんだから。
三原山　なにわけの分からないこと喋ってンだ。
宝木　嘘じゃないって、ほら。

宝木、ポケットから、手のひら大の赤いブリキのハート形３枚とダイヤ形１枚を取り出す。

三原山　ダメだ、こりゃ。もういい、自分で持ってく。坂口さんち、どこ？
宝木　ああ、これ（ダイヤ）？　これは照子の心臓。さっきそこで拾ったんだ。
三原山　どこなの？　坂口さんの家は。
宝木　照子はダイヤが好きだった。
三原山　おい。
宝木　きれいだろ、キラキラ光って。なんだかまだ生きてるみたいだ。
三原山　誰と喋ってンだ。
宝木　ああ、雲が流れて。いい風だ。
三原山　風？　吹いてない、風なんか。
宝木　あ、芽が出てる（と、木の切り口を見て）。強いなあ、植物は。
三原山　芽？　（と、木を調べ）出てないじゃないか、芽なんかどこにも。
宝木　〜ぼくらはみんな生きている　生きているから歌うんだ（と、歌いながら、地面に足で土俵を描いている）
三原山　いかんいかん。こんなバカの相手になってるひまなんかないんだ。どっちだったかな、坂口さんの住んでるアパートは。（と、去ろうとすると）
宝木　おっと、三原山、肩透かしを食らって土俵際まで吹っ飛んだ。今日も負けたか、三原山。
三原山　（振り返り）なんだ？
宝木　残った残った、残りました、残っております三原山。
三原山　誰なの？　おたく。
宝木　いいなあ、呼び込みの太鼓の音は。
三原山　えっ？　……

相撲太鼓の音が遠くから流れてくる。

三原山　そうか。明日からまた大相撲が始まるんだ。

ふたりは耳をすましている。
相撲太鼓にかぶって、ＰＰＭの「悲惨な戦争」が流れる。
静かに。

幕

付記

本作品は、長谷川伸の戯曲、「瞼の母」「一本刀土俵入り」及び、同作家の戯曲を原作とする映画「関の弥太っぺ」（監督・山下耕作）にインスパイアされて書かれたものである。感謝。